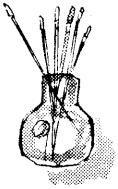
人

フランシス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界（三）

秋山達子



ウィックス夫人は情緒障害児の問題について、C・G・ユングの心理学を学びながら、彼女自身の臨床の経験をもとにして、多くのことを書き残していますが、その中でも子どもと想像上の友だちとの交友に関するものは、特に興味深く印象に残ります。これについてウィックス夫人は「幼年期の内的世界」の中で一章にまとめておられますので、その中から数例をとってここにご紹介しようと思います。

誰でも多かれ少なかれ、子ども時代の思い出の中に想像上の友だちを持った経験をお持ちのことと思いますが、ウィックス夫人はこれらの友だちが肯定的にも否定的にも、子どもの情緒面の発達に大きな影響を与えることを指摘しています。

子どもたちは幻想の中の自分やまた多様な人格の面を、人間にばかりでなくしばしば物にも投影しますが、例えば次の事例では、それらをいつも人形に投影して、いろいろな違った性格を持つ人形たちと一場の劇を演じていた少女の話です。

彼女は大柄で動作の鈍い無器用な子どもでしたが、体も感情も大きすぎて、統制がとれず、優雅に振る舞いたいと思っても体がいうことをきかず、そのあげく激情のあまりに落着いて自分の気持を表現することもうまくできませんでした。それで他の子どもたちといっしょに遊ぶことも少なく、たくさんのお人形を相手にひとり遊びをしていましたが、その中でも特に二つの人形には特別の役割と性格を与えているようでした。

一つは青い目で金髪の小さな人形で、いつも利口で輝かしく知的なことや社交的なことが得意のようでしたが、もう一つは布製のやぼったい人形で、のろまで愚かでいつもしかられる役割をしていました。学校ごっこをするときも金髪の人形はよくできて、ほめられましたが、時には何か小さい失敗をして激しく打たれ、きびしくしつけられました。こんな時にはいつも布製の人形がやさしく抱きかかえられて、母親的な愛情を注がれました。この人形遊びの中での感情の激しい表現が、普段はおっとりとして静かな少女の行動とあまりにもかけ離れているように思われたので、母親が不思議に思って相談に来られたのです。

そして次のことが明らかになりました。布製の人形は、人々が彼女をそのように考え、また自分でもそう信じている現実の彼女自身であり、また金髪の人形はいつもそうでありたいと考えている幻想の彼女自身であったのです。そしてこの人形と自分を同一視することで、もし本当にこのように美しく可愛らしかったら当然彼女のものとなるはずの勝利感や喜びを味わうために、彼女はこの人形をとおしてつらい現実から逃避していたのです。

しかし現実の世界であまりに強くみじめさを感じるような時には、現実と幻想の違いを認めさせられて自分があわれになり、幻想の自分を打って痛めつけ、軽蔑している自分の方に同情を寄せるのでした。こうして人形遊びの中に彼女は不満や激情のはけ口を見出していたのですが、これをつづけていると、二つの人格が完全に分裂して大きな問題となることもあるので、母親が人形遊びの異常な激しさに気がついたのは賢明なことであったと思います。

このような事情がわかると、母親はいっしょに人形遊びに加わって、布製の人形の目だたないけれどもやさしい性格や、よい点を指摘して現実の少女を励ましました。また遊びを通じて子どもの気持をよく理解することによって、今までよりもはるかに親密な関係を作りあげたことは、なににもましてその後の少女の成長に役立ったことと思います。

これに関連することで、ある若い女性が話してくれたことですが、彼女もやはり同年齢の子どもたちよりも大柄で、いつも深い青い目をした金髪の捲毛の少女の姿に憧れていました。そしてみにくい大きな自分はただ殻なのであって、その中にはこのような可愛い子どもが住んでいるものと想像し、いつか表面の殻が破れて、中から美しく優雅な王女さまがあらわれるかもしれないと期待していたのです。

そして心の中に住むもう一人の自分はそのうちに勝手に成長して、もう一つの人格を作りあげました。彼女は長い少女時代に、両親やまわりの人々に心の中の美しいもう一人の自分を理解してもらいたかったのですが、誰もわかってくれる人もないままに、彼女もまた本当の自分を受け入れることもできなくなって、現実でおもしろくないことがあると、すぐ心の中に逃げ込んでしまうようになりました。

彼女は大柄ではあっても実際にはなかなか魅力のある女性でしたが、他人とはよい関係を持つことができず、特に男性は決してこんな大きな女性を愛することはないだろうと信じこんでいました。彼女はまた食べるということは不思議なことだと考えて、きっとお腹の中にはもう一つの世界があって、そこには外の世界のように街があったり、人々が住んでいるのではないかと想像してみたり、また幸福な子どもたちが輪になって踊ったり歌ったりしているのかもしれないと考えて、食事の時にはいつも彼らにも食べさせているような気持になることもありました。

このように内の世界は外の世界とは別に発展し、父親が彼女をあまりかまいつけなかったことなども影響して、最後にはあまりにもふくらんだ心の中の世界が彼女をおびやかすようになり、とうとう神経症を誘発してしまったのです。

この話とは対照的に両親の愛に恵まれた健康な子どもたちもまた想像上の友だちを持っています。ある少女は幼稚園に行かなかったので、小さい時は現実に遊ぶ友だちをあまり持っていなかったのですが、お庭にはいつもたくさんの仙女や小人の友だちがいました。毎朝起きるとすぐに窓を明けて彼らに挨拶をし、それからお庭に走り出て、彼らと話をしたり、遊びを発明したりしました。

冬にはよく家の中にも入ってくることがあったので、彼らをよく見ることができないおとなたちが踏んだり、上に腰かけたりしないように、よく気をつけていなければなりませんでした。しかし少女が学校に行くようになると、これらの遊び友だちは次第に姿を消して、雨の日に彼女を訪れてくる程度になりましたが、現実の友だちがふえるにつれて、この連中の姿は全く見えなくなりました。

また別の少女は二人の想像上の友だちを持っていましたが、彼らはいつでも手をのばせばとどくあたりにいて、彼女はそれぞれに名前をつけて呼んだり、いっしょに踊ったり走ったりして仲良く遊ぶのでした。このような例では想像上の友だちは肯定的な存在で、成長するにつれて姿を消すように思われますが、実際は思春期の幻想やおとなになってからの夢の中にも繰返しあらわれて、想像力となって残り、彼女たちの生涯を豊かにします。

さて、ここにユングも自著に引用している大変興味深い事例があります。それは小さい時の手術の結果、いくらかの肉体上の欠陥と精神上の不安定さを残している七歳になるマーガレットという少女の話です。

彼女は愛情深い両親の下で、ペットや年下の友だちやその他、他の人たちには見えない多くの想像上の友だちにかこまれて、毎日を気楽に暮していたのですが、学校に行くようになった時に、今まで現実とは関係がなく、まったく彼女一人のものであった自由な時間の大部分を奪われてしまうことになりました。彼女は肉体的には不利な条件を背負っていましたが、豊かな想像力を持つ少女で、このような少女を保護する

ためには強い愛情しかないと思われたのですが、彼女はこの愛情による保護もよく承知していました。それに甘えてかえって両親をいつまでも支配するために、肉体的に不利な状態を保とうとするようなところもありました。

それらは両親の愛や注意を自分に集めるのに都合がよかったのです。そしてはじめて他の子どもたちと出会うようになって、それらが現実では劣等なこととして軽蔑されることがわかったのです。そこで彼女は意識の上では他の子どもたちと同様になんでもできるようになりたいと思ったのですが、また一方無意識の中では、支配力を与える道具として、自分の不利な条件にしがみついていたかったのです。

そして新しい世界に慣れようといくらか努力はしてみましたが、すぐに昔のたよりなさと幻想の中に退いて、左利きの手の無器用さや軽い歩行困難などの肉体的な問題がかえって誇張されるようになり、見せかけの甘えた生活に戻ってしまいました。

ある日家で先生と勉強していた時に、彼女は突然「私には双子のアンナという姉妹があって、私によく似ているけれどもいつもきれいな服を着て眼鏡もかけていないのよ。（彼女は視力が弱いために勉強の時には眼鏡をかけましたが、それを嫌っていました）もしアンナがいっしょなら、もっとよく勉強できるのに」と言いました。

そして先生の許可を得ると部屋の外に出て早速アンナを連れてきましたが、それから後はいつもアンナが傍にいて、彼女が書きとりをすると、アンナが書くといった具合に勉強が進められました。ある日すべてがうまくいかなくて、マーガレットは癇癪を起こして、皆母親が悪いのだといって泣き出しましたが、アンナに聞いてみたらと言われると、しばらく部屋の外に出ていましたが、やがて戻ってきて、「アンナは私の方が悪いと言うのよ、だから勉強を続けるわ」と再び静かに机に向かいました。

時には気持が混乱してアンナも故意に忘れられることもありましたが、しばらくすると「きっとアンナは淋しがっているわ、もう戻って来る頃じゃないかしら」という声とともに、アンナは再びあらわれるのでした。

またもう一人の想像上の友だちがいましたが、彼女はめくらなので、いろいろと助けてやらなければなりませんでした。彼女はめくらならばいやなことは何もしなくてもよいから幸福なのだと説明しましたが、めくらの子どもの作った労作を見せられると不利な条件の下でも甘えてはいけないのだということがわかったのか、大変感心したようで、それからこのめくらの少女はあまりあらわれなくなりました。

そしてしばらくたってから、また母親に対して怒りを爆発させたことがありましたが、アンナに聞いてごらんという忠告を聞いてしばらく考えていましたが、やがて「アンナに聞かなくたって、そのくらいは私にもわかるわ、本当は私が悪いのよ」と言ってすぐにおとなしく机に向かいました。この頃にはアンナは彼女の分身の投影

であることがわかりかけたようですが、もちろんこのような心理の成長の過程は簡単ではなく、三歩進んでは二歩戻るというように進行と退行を繰り返しながら発展していったのです。

このような子どもを幻想の世界から切り離そうとすることは大きな誤りです。それは現実逃避に使われない限り、未知の国の富と資源のあらわれであって、子どもの成長には何より大事なものです。彼女はこうして外の世界でも内の世界でも徐々に成長していきましたが、ある日は学校から飛んで帰ると椅子によじのぼって二時間もじっと一人で考えごとをした後で、いかにも満足そうに椅子から降りると、今度は元気に外の世界や現実のお友だちの中に遊びに出ていくようになりました。

このように、なんとかしてアンナに投影された分身を自分の中に受け入れようと努力をしていた頃、ダフィというもう一人の少女があらわれました。ダフィはおとなにもならず、よい子でもなくて、アンナが無意識の明るい面を代表しているとすると、ダフィは暗く退行的な面をあらわしているように思えました。勉強をしている時や学校ではダフィはあまりあらわれないようでしたが、うちであまやかされてのんびりしている時には、靴の紐も結べず、洋服も一人で着られない赤ちゃんで怒りっぽいダフィが時々傍にいるようでした。しかしマーガレットが成長するにつれてダフィのわがままは彼女の目にあまるようになり、しばしばキキ・ハウスと彼女が名づけた近所の古い空家の中に閉じこめられてしまうようになりました。

アンナはその後もしばらく彼女のよい友だちとして傍に残っていましたが、やがてマーガレットが一人でなんでもできるようになり一般のクラスに入って他の子どもたちといっしょに遊べるようになると、「いつか近いうちに、私は双子の姉妹を押しつぶして殺してしまうわよ」という言葉とともに次第に姿を消してしまいました。

マーガレットのように、幼児期の病気やその他の理由で不利な条件のもとに育つ子どもたちには、普通の子どもたちよりも深い愛情と厚い保護が必要なのは当然です。しかしこれはどうしても過保護になりがちであって、むずかしい現実からますます逃避する場所を与えることになってしまいます。このような時にどこで保護を打ち切るかということはむずかしい問題ですが、より深い愛情の下に育った子どもは愛情薄く育った子どもよりも、よい立場にあることは確かです。ただどちらの場合にも普通の生活や社会の責任に適応するためにはむずかしい時期を通らなければなりません。

マーガレットは自分をとりまく安全で保護された世界から、初めて彼女一人が愛情の対象というわけではない冷たい外の世界に出た時には、驚いて自分一人で支配していられる幼児的な世界に戻ろうとしましたが、心の奥深くでは、進もうとする彼女と退こうとする彼女が争うことになりました。

外界では彼女は幼児的な自分と組んで行動したが、もう一人の自分はアンナという

姿に投影されて、二つに分かれた彼女自身が現実に対決することになったのです。

ここでこの二人が永久に別の道を進むことになるか、または一つの人格の中に統合されるか、というところに問題があります。前者の場合は退行的な半身はいつまでも子どもっぽい行動を続け、一方進行的な半身は幻想の世界から出ることはできません。そして後者の場合は投影された幻想の半身は再び個人の中に受け入れられて、一つの人格の中に統合されるのです。

マーガレットははじめこそあまりにきびしい現実に直面して幼児的な世界に退行しかけましたが、しかしそれはよくないことだということは知っていました。そしてアンナがあらわれて、ただ他人から押しつけられただけでは恐らく認めることができなかったであろう真実を受け入れることができ、ついにはアンナと同様になんでもよく聞きわけられるようになり、アンナは不必要となって、最後には殺されて死ぬことになりました。しかし前にも書きましたように、アンナの死と共に幻想的な世界が全面的になくなるわけではありません。この世界こそ生きている創造力の源泉であり、人間の成長過程で、古くなった象徴を除いて常に新しい状態に即した象徴を生み出していく力となるものなのです。

幻想の世界はいつも遊び友だちとして対象化されるとは限りませんが、ただ友だちとして人格化された場合は、内的世界を知るためのよい端緒となります。

子どもの気質によって、この人格化はいろいろな姿をとりますが、例えばある少女は支配的な母親の役割が好きで、多勢の想像上の子どもたちを抱えて世話をするのが好きでしたし、またある少女はとても気がやさしくて、彼女の友だちは皆双子でした。そして家族の誰かが旅行したりする時にはいつでもそのうちの一人を借してあげようと考えていました。ある少年は暖房用のラジエーターの後に住んでいる「三人の王様」を友だちに持っていて、彼らはラジエーターの栓を開けばいつでも飛びだしてくるのでした。彼らは神秘的な力を持っていて、この臆病な少年が恐ろしい気分に襲われる時には心の中でそっとラジエーターの栓をひねるのでしたが、そうすると自分の中に神秘的な力が溢れ出て、恐ろしい気持も消えました。

家庭的に淋しい子どもたちもよく想像上の友だちを持つものですが、ある父親を無くした貧しい子どもは、いろいろなものを買ってくれる想像上の父親を持っていましたし、また両親が仕事で忙しい家庭の子どもは、その子にだけしか存在のわからない「本当の」姉妹を持っていました。このように情緒的に障害のある子どもたちばかりでなく、多くの健康な子どもたちもまた想像上の友だちを持っているのです。個人の主体性と人格の確立は長い苦しい過程を必要とするもので、多くのおとなたちもそれを達成しているとは言えません。まして子どもたちはまだ将来の可能性の中に住んでいるのであり、多様な状況に出会って多様な面を発展させ、その中から価値のあるも

のを残して、価値のないものや害になるものを除きながら一つの人格を作りあげていくのですが、これらの過程では、想像上の友だちが多くの役割を果たします。

健康な子どもたちは幻想の中に英雄や王女の姿を描き、それらはお伽話のように自然に受け入れられ、楽しまれて、成長を助ける役目を果たした後に忘れられていきます。しかしまたそれらが、現実の逃避や責任逃れのために使われる時はジキル博士とハイド氏のような二重人格を作りあげることにもなります。

そして最後に、子どもの魂は輝かしい暗黒と霊性の神秘な世界に住んでいますが、意識化に向かって不断の努力を続ける自我の出現に伴って、この霊的な世界からも友だちが訪れることがあります。この心の深奥から来る友だちは、知的に理解されるというよりも、むしろ未知の、そして不可知の世界に住む魂そのものの象徴として体験されるといった方が、適当でしょう。

「僕には友だちがあって、彼はキラキラ星のように小さくて、まっくら闇のように大きい」この友だちがいつどこからあらわれたものかはわからないが、少年がこう言った時には彼は既にその子どもの心の中に存在していたのでした。静かな暗黙の了解のうちにこの友だちはあらわれたが、私はここにただ、それが子どもの自我と魂との対話の形をとってあらわれたことを知る特権を持ったとしるすことしかできません。

「キラキラ星は星よりも小さいけれども、それは本当の星なんだよ、そして花火のようにきらめくけれども、いつまでもきらめきつづけるんだ」「そしてまっくら闇は昼でもやってくることがある。そんな時には僕はキラキラ星のことを考えようと努力するんだ。星がまっくら闇のまん中できらめきだすのを見ると、僕はやらなければならないことはなんでもやりとげられるように思うんだ。そしてまっくら闇もまた僕の友だちなんだと思うんだよ」

このまっくら闇こそ、意識の明るい光を覆い隠して人を無力感に誘う無意識の流れであり、未知の世界の恐れと悪と無知を中に秘めた暗い影なのです。しかしこのまっくら闇もまた友であり、いつか祝福を授かる時までは対決を続けなければならない天使なのです。そしてこの中にキラキラ星を見いだそうとする努力こそ、この体験を得るために絶対必要な条件であり、その光は限りなく永遠に消えることもない。それは無数の蓮の花にかこまれて静かにすわられて、瞑想の中から光を放つ仏様の御姿であり、子どもの心の中に浮かび上がった生命の根元である真実の自己の幻想です。

それから四十年たち、今では一人前の男性に成長したその時の子どもの魂の中で、キラキラ星とまっくら闇は限りない統合に向かって変容の力を働かせています。

このようにフランシス・ウィックス夫人は想像上の友だちという一章を結んでいます。ウィックス夫人については、まだおしらせしたいこともいろいろとありますが、あまり長くなりますので、この辺で一応筆をおくことにしたいと思います。